

「地域の水と共に生きる！」

－ 遠くなった「使う水の道」と「使った水の道」を考える －

『身近な水と遠くの水の循環』



毎日の暮らしの中で、水を飲まない、お風呂や洗濯に水を使わない、そんな日はありません。使った水を捨て流さない日もまた一日もありません。



水は毎日の暮らしの中でとても身近な存在です。

そんな水は、今も昔も変りなく絶え間なく地域を流れ循環してきました。循環する水は、様々な水の道を通っています。水がとても身近な存在である一方で、そんな水の道を

考えてみたことはありますか？蛇口までの水の流れや排水口やトイレに流した後の水の流れや水の循環を意識することがありますか？

今日のテーマは「水の身近さと遠くなった水の道」についてです。



『暮らしの中にあつた水の道と水循環』



飲む水、洗い物の水、色々な水があります。「川や湖に水を汲みに…、洗い物や洗濯に…」といった生活様式は、昔話にも出てくる通り日本の暮らしの風景だったのです。蛇口をひねれば水が出る

上水道の普及が進む前には、こうした水の流れと直接ふれ合うことは暮らし中に当たり前にある光景だったのです。使う水の道は日常生活の中にあつたといえます。

生きるという営みの中で排泄物や生活排水が出てくることも、今も昔も変わりません。こうした排泄物は田んぼや畑に作られた肥溜めなどを通して肥料となり、田んぼや畑から水の道に戻っていきともありました。生活排水も、水の分解力などを活用する昔ながら



の知恵を使い、うまく処理が進む場所を選びながら川や湖にそして海に流されていきました。水洗トイレや下水道インフラが普及するまで、使った水の道もまさに生活の中にあつたのです。使う水の為に

水の道に触れること、使った水を水の道に戻すこと、どちらも日常の一コマでした。その為、地域の水の循環を支える水の道は身近に意識されたものであつたと思われます。

『遠くなった水の道』



使う水の道＝上水道の普及により、飲む水、洗う水の為に川や湖に水を汲みに行くことはなくなりました。「蛇口」をひねることで、使う水は手に入るようになったのです。使う水の道に直接接触れる機会は暮らしの中からはなくなりました。また、排泄物の処理や生活排水について



も、使った水の道＝水洗トイレや下水道インフラが普及し、水の道に戻すことが生活の中で意識されなくなりました。水の身近さは全く変わっていませんが、水インフラの普及と共に、使う水の道や使った水の道と毎日暮らしの距離は遠くなったのです。

『健全な地域の水の循環と水インフラ』

使う水の道、使った水の道が遠くなったことは、上下水道といった水インフラの整備が進んだお蔭です。このような水インフラは、水が欠かせない生活を衛生的で便利な暮らしに変えてくれました。また、こうした水インフラは清らかな水で地域を潤し、美味しいお米や野菜や海の幸が毎日の食卓を彩ることに貢献してくれています。森から川へそして海に流れ込



む絶え間ない水の循環は、水インフラと一体となって創り上げられた水の道であることがわかります。

『水の道を考える』

水の道が遠くなったことは勿論問題ではありません。水インフラのお蔭で、便利で安心して衛生的に暮らすことができます。水インフラもまた、地域の水の道を創り上げた先人たちの叡智の結集だと思います。水インフラと一体となって山・川・里・海が創り上げる地域の水の道や水の循環は、将来の子供たちに残すべき地域の誇るべき資源だと思われませんか。

地域のことを考える時、山や川や海を思い浮かべることが多いと思います。地域の山、川、里、海を脈々と流れている水の道も、地域を支える大事な資源であり資産です。だからこそ、それらを支える水インフラやそれを支える人々の絶え間ない活動も思い浮かべてみる価値があるのではないのでしょうか。蛇口を捻った時に、シャワーを浴びている時に、そんな水インフラや水の道のことを考えてみてはいかがでしょうか。

